

古本エッセー

私の名前は古本。ご主人様は私を初めて読み終わった時、「いずれまた読みたい」と、未だインクの匂いが漂う初々しい私を、本棚の真ん中に並べたのでした。

それから数十年の歳月が流れました。世の中に人の心ほど移ろい易いものはありません。この間、ご主人様が私の頁をめくったことは一度もなく、私の肌の色は黄色く変色し、今では埃すら被っていません。

ご主人様もお年を召され、終活という名の身辺整理を始めたのですが、私をはじめ膨大な古本の始末には、手を焼かれています。ある時古本屋に連れて行かれたものの、薄汚れた私たちは引き取りを拒まれました。

そうなるかと廃棄されるのを待つのみなのですが、ご主人様も一度は心を寄せた私たち

を捨てるのは、さすがに忍びないようで、片づけは一向にはかどりません。私たちこのままでは、書架の片隅で飼いきれにされてしまいそうです。

でもね、私たちだって、このまま生涯を終えたくはないんです。古本の意地というか、最後のひと花を咲かせてみたいんです。廃棄処分運命には逆らえないとしても、その前に今一度、新しいご主人様に巡り逢えるチャンスはないのでしょうか？そのための仕組みができないものではないでしょうか？

私たち古本に新たな息吹を吹き込む仕掛け、ちょいと考えてみてください、館長さん！